

「2つの恋愛物語」

総園長 宮下 智

その日、H男さんは、K子さんを「いっしょにパフェを食べよう」と誘っていた。初めてのデートだった。二人とも世間的には、車椅子使用の重度障がい者だ。H男さんもK子さんも、片言の言葉を話すことができるに過ぎない。

事の始まりはこうである。明星では、仲間支援と呼ばれる標準支援メニューがある。それは、どんなに障がいの重い知的障がいの方々にあっても、彼らはひとりぼっちなのではなく、特に入所施設という場所においては、何十年もいっしょに暮しているという条件のもと、異動や退職や担任変更があり、ある意味不安定な関係しか作り出せない職員が彼らを支えているのではなく、同じ知的障がいというハンディを背負う者同士で、よりわかりあい、支え合っているのではないかという考えに基づいている。話せないけど、気持ちはつながっている、伝えられないけど、気持ちを寄せているという状況を想定しているというわけだ。

「なんだかわからないけれどAさん、Bさんの顔を覗き込んでいるよね」「なんだかわからないけどAさん、Bさんの居室によく入っているよね」、そんな言葉の端々には、実はAさんがBさんに寄せる思いが隠されているのである。

職員があるとき、H男さんに聞いた。「H男さん、いつも仲間にと誘われるばかりだから、今度は、自分で誰かを誘ってみるのはどう？」と。H男さん、とてもやさしい、物静かな人なので、仲間支援では、よく他のメンバーさんから誘われている。でも、やっぱり大切なのは、自らが主催するイベントだ。主体的な人生、自分らしい人生を考えたとき、自らが主催者になることは必要条件だ。自分に自信がないと他人は誘えないし、誘うのにも勇気がいる。自分たちの思春期の初デートを思い出せば、<誘う>ことの大変さは十分想像できるはずだ。

すると、H男さん、もじもじしながら、たくさんのメンバーさんの写真カード中から、なんと想定外のK子さんの写真を選んだのである。「まさか…」の職員は、何度も聞き直したが、彼の思いは一途にK子さんに向けられていた。K子さん、知的障がい+身体障がい、そして視覚障がいに、てんかん発作、4つの重複障がい者である。「そういえば、二人、一日中（ということは、一年中だけ）、フロアで車椅子並べていっしょだよなあ」なんて支援職員は言うてはみたが、H男さんのK子さんに寄せる思いにはこの20年間、全く気がついていない職員集団だった。

さて、作戦会議である。仲間支援は、多くは「いっしょに食べる」ところから始めることが多い。H男さんに聞くと「たべる〜！」と答えてくれる。「そうだなあ、初デートだから、パフェなんかいいんじゃない？」「女子は、なんて言ったって甘いもんが良いからね」なんて知ったかぶりで提案しながら、結局、初デートのメニューは支援職員とH男さん、合議の上「フルーツパフェ」となる。

H男さんからK子さんに招待状が届く。K子さんからも快諾の返事が、H男さんに届く。そして、当日。本番になって支援職員は気がついた。

「あ！K子さん甘いものが大嫌いだったんだ」

もちろん、K子さんは、出されたパフェが食べられない。一口、二口と口に運ぶが、そこで止まってしまう。そして、なんと、大嫌いを聞いたH男さんもパフェが食べられない。

「ごめん、ごめん、K子さん、甘いもの大嫌いだったんだ」「気がつかなくてごめんね、本当にごめんね…」H男さんに、謝罪する支援職員だが、初デートは支援職員の配慮の無さが原因で明らかに失敗に終わったのだ。

そして、次の日から、二人の気持ちはともに落ち込んだ。H男さんは、確かに支援職員の配慮の無さに怒れただろうが、それ以上に「嫌いなパフェに誘ってしまって、きっとK子さんは、僕を嫌いになったのではないか？」と食事がとれなくなった。一方、K子さんも「せっかくのパフェを嫌いだって言って食べなかったから、私は絶対に嫌われている」「嫌いだって、誘われた時に伝えていれば、こんなことにはならなかったのに」と食事がのどを通らなくなった。

職員集団は慌てた。自分たちのせいで、二人に食事をとれないほどの心の傷をつけてしまったのではないかと。

リベンジ大作戦がすぐに動き始めた。「二人共通で、絶対好きなものは何か？」の情報収集が始まった。答えは「焼肉」、二人を呼んで「焼肉」でリベンジデートをすることを約束した。

「焼肉」が決まって、二人とも安心したのか、二人とも食事を食べることができるようになった。(すごい！)

さて、ここで皆さんに、自分の人生を振り返ってみて欲しい。「デートがうまくいなくて、食事がのどを通らないほど、落ち込んだり、悩んだりしたことがありますか？」と。

二人とも車椅子、自分の力で、相手に近づくことができない二人が、そして、ほとんど言葉を交わすことができない彼ら二人が、食事がとれないほどの落ち込んだ気持ちになる、その背景にある二人の〈好き〉の気持ちの分量は、いったいどれほどのものなのか？と。

知的障がいの方を相手にして、私たちは簡単にこう思う。「私たちが支えているのだ」と。だって私たちの職種は、生活支援員だものね。が、それよりも深く、それよりも力強く支え合っているのは彼ら同士なのだ。確かに重い知的障がいのある方々同士はコミュニケーションが取れず、それぞれは孤立しているように見える。つながっていて、関係が取れているように見えるのは、支援職員との間だけのように見える。しかし、それは明らかに違うのだ。

異性を好きになる、いっしょにパフェを食べたいと思う、バレンタインにチョコレートが届くかな？ホワイトデーにクッキーが届くかな？誕生日プレゼントなににしよう？これらのことがどれだけ人生に華をそえ、彩りのあるものに変えていくのか？を想像して欲しい。

でも、彼らは「好き」も「ありがとう」も自分だけの力では伝えられないのだ。誰かの応援がいる。質の高い支援が無ければ、彼らの気持ちは、好きな人、大切な人に伝わらないのだ。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

H子さんが、足元がフラフラだ。もう一ヶ月近く改善しないという。時には転倒してしまう。過去に彼女がフラフラになるときは、決まって家族、特に今は亡くなってしまったけれど、母親とのコミュニケーションに課題がある時だ。お母さまが亡くなった後は、もっぱら兄弟姉妹との関係が不安定になった時にフラフラが生じていた。だから、この一ヶ月、支援職員は家族関係を中心に支援を提供していたが、状態は一向に改善しなかった。今までのフラフラと様子が違うことが次第にはっきりしてきたのである。

そこで一ヶ月前のできごとに焦点を当てて、彼女の気持ちのありどころを再検討してみる。一ヶ月前？バレンタインデーだ。

「チョコレート、プレゼントしている？」「しています」

「誰に？」「職員数名とメンバーさん数名です」

「誰か、本命を忘れていないってことはない？」「……、そうだ！昔からH子さん、私の恋人は、K男さんで～すと言っていました、K男さんには、チョコレート、プレゼントされていません」

さっそく本人と相談だ。すると本人の口からはなかなかK男さんの名前が出てこない。誰でも本命を口にするのは勇気があることなのだ。やっとやっと彼女がK男さんの名前を口にするのができ、遅まきながらチョコレートのプレゼントをすることが決まったころには、彼女のフラフラは改善に向かったのだ。た。(すごい！)

今までは家族関係の心配ごとでいつもフラフラになっていた彼女が、今回は好きな異性の心配ごとでフラフラになる。家族と好きな異性とが同レベルの心配ごとになっているのである。家族にばかり支えられていると思っていたH子さんが、自分たちの知らないうちに、仲間同士で、しかも異性によって支えられるようになっていたのである。

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

定型発達と呼ばれている私たちと重度知的障がいと呼ばれている彼らと、自立の仕方も、支えられ方もちっとも変わりやしない。彼らも私たちも同じ気持ちを抱いているという前提さえ信じる事ができれば、彼らは私たちに「人を好きになること」の大切さを教えてくれるのである。

WELCOME TO SATORU WORLD

障がい者支援施設明星学園における心のケア

<http://myojo-satoru.life.coocan.jp>

Facebook : <https://www.facebook.com/satoru.miyashita.1>